



こやす なかがわら **子易・中川原遺跡** こやす おおつぼ **子易・大坪遺跡 (伊勢原市No. 123)**

**所在地** 伊勢原市子易地内  
**期間** 平成 31 (2019) 年 4 月 1 日～  
 令和 2 (2020) 年 3 月 31 日  
**調査面積** 7,258㎡  
**担当者** 池田 治・出縄康行・井辺一徳  
 央戸信悟・新開基史・長澤保崇  
 新山保和・野坂知広・古谷 涉  
 三瓶裕司・南出俊彦・宮井 香

**調査概要**

子易・中川原遺跡および子易・大坪遺跡（伊勢原市No. 123）は、伊勢原市子易地区に所在する周知の遺跡で、新東名高速道路建設事業に先立ち、平成 24 年 9 月より発掘調査を実施しています。調査は今年度も継続中で、新たな発見が相次いでいます。

平成 31 年度は、子易・中川原遺跡 7 地点 (6,866㎡)、子易・大坪遺跡 1 地点 (392㎡) の



図1 調査地の位置 (1/25000)

調査を行いました。発見された遺構・遺物の時代は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世に亘っています。

**子易・中川原遺跡**

伊勢原市子易地内に所在する遺跡で、標高

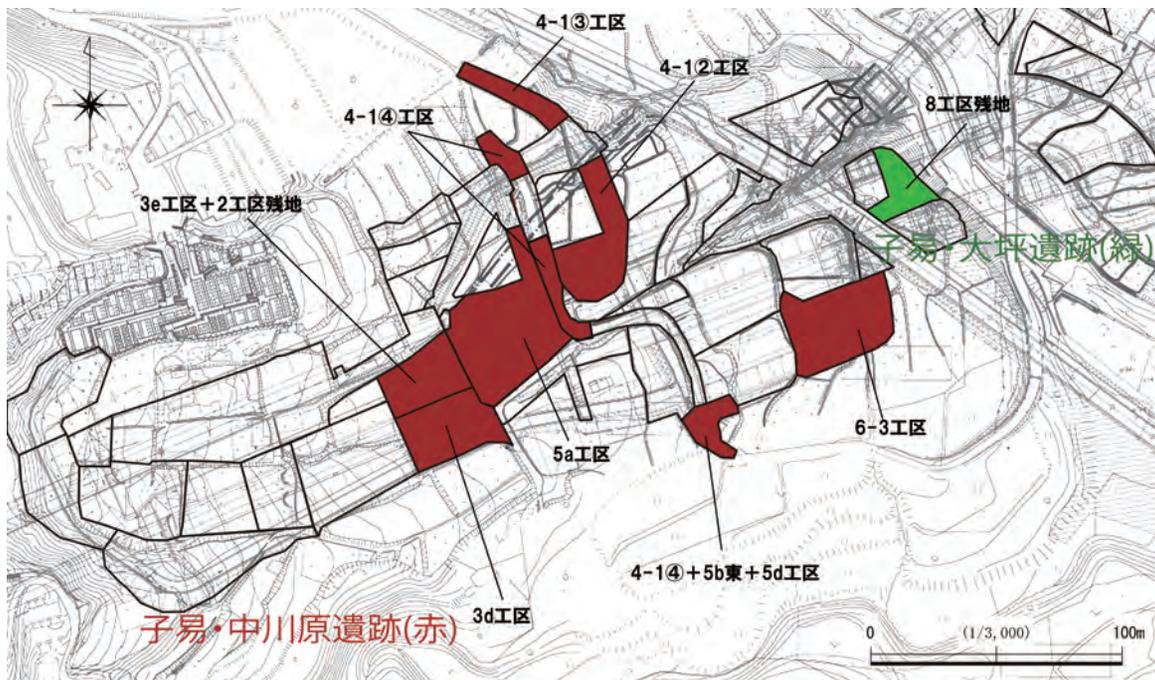


図2 平成 31 年度調査区配置図 (1/3000)

108～130 m程の丹沢山地南東山麓から鈴川右岸段丘面に立地しています。地形的には斜面地にあたりますが、中世以降に大規模な土地改変がなされたと推定され、現状では大きな平場地形が段々畑状に連なっています。過年度調査の成果では、6-1 工区および6-2 工区において掘立柱建物群を主体とする中世（鎌倉時代～南北朝時代）の屋敷跡が発見され、大いに注目を集めました。これまでに20棟を超える掘立柱建物跡が発見されています。1-1 工区および2 工区では中世の大規模な池状遺構が発見され、その下流側の調査区から「急急如律令」等の呪句が墨書された呪符木簡が出土しています。また、中世池状遺構は、堰堤によって自然の谷地形を堰き止めて造成されたことが判明しています。中世池状遺構の上流側にあたる1-1 工区・1-2 工区および1-4a 工区では、礎石建物群を主体とする中世（鎌倉時代）の寺院跡が発見されています。中央の礎石建物跡は地山（ローム）削り出しの基壇を持つ3間×4間の規模があり、その両翼にも3間×3間の礎石建物跡が見つっています。なお、かかる中世寺院跡へと向かう参道と想定される石敷溝状遺構が3d 工区で発見されており、平成31年度は5a 工区でその延伸部分を調査しています。

4-1 ①工区および4-2 工区西においては、縄文時代中期後葉の集落跡が発見されています。また、4-2 工区西および4-1 ②工区、4-1 ③工区、5c 工区にまたがって縄文時代後期前葉～中葉の集落跡が広く展開することが分かっています。等高線に沿って居住域があり、その前面

に墓域・祭祀域が配置されるという集落構造の一端も判明しています。これまでに竪穴住居跡・敷石住居跡が60軒以上確認されており、土坑墓・配石墓も80基以上、多数の配石遺構も検出されています。

平成31年度は、3d 工区・3e 工区+2 工区残地・4-1 ②工区・4-1 ③工区・4-1 ④工区+5b 工区東+5d 工区・4-1 ④工区+5a 工区・6-3 工区の調査を実施しました。

**【3d 工区の調査】** 平成31年度は、前年度から継続して縄文～奈良・平安時代面の調査を実施しています。3d 工区は谷地形にあたるため、土壤に水分が多く含まれた湿地的環境にあり、多くの木質遺物が出土しています。奈良・平安時代面では、曲げ物、火切り臼などの木製品の他、大量のモモの種子が検出されました。

その下位の弥生時代面では、調査区北西側から東側に向かって大きく蛇行しながら流れ下る河道が発見され、やはり自然流木や木片が集中する箇所が複数確認されています。また、大量のトチ、クルミの種子が出土しました。

**【3e 工区+2 工区残地の調査】** 平成31年度は、近世面、中世面、奈良・平安時代面、弥生時代面、縄文時代面の調査を実施しています。中世面では、2 工区残地で土留めと思われる杭列を伴う大型礫の集中部を3箇所検出しており、一部には1 mを超える大きな板材も発見されています。また、礫集中部とその周辺からは土器や木製品が多数出土しています。奈良・平安時代面では、調査区西側で水田跡が発見された他、複数の溝状遺構や杭列などが検出されました。弥



写真1 3d 工区弥生時代河道検出状況（南から）



写真3 4-1 ②工区 J29 号住居掘り方完掘（南東から）



写真2 3e 工区 +2 工区残地奈良・平安時代面全景（西から）



写真4 4-1 ②工区旧石器出土状況（南から）

生時代面および縄文時代面では、北側斜面で陥し穴が発見されています。

**【4-1 ②工区の調査】** 平成31年度は、前年度から縄文時代面および旧石器時代面の調査を実施しています。縄文時代面では、前年度の調査成果と合わせると30軒近くの住居跡が発見されています。これらのうち、J29号住居は周堤礫と環礫方形配石を持つ敷石住居跡ですが、周堤礫や環礫方形配石を取り外した下位から重複するようにもう2軒の住居跡が検出されています。円形に廻る周礫と敷石が確認されました。

旧石器時代面では、グリッド調査でL1H相当層下層からB1相当層上層にかけて黒曜石を主体とする石器集中部と礫群が発見されていま

す。最終的には400点近い石器が出土しました。

**【4-1 ③工区の調査】** 平成31年度は、前年度から継続して縄文時代面の調査を実施しています。調査区西側では、前年度に調査した配石群の下部から、新たに縄文時代後期末葉～晩期初頭の竪穴住居跡が1軒発見されました。石囲炉を持ち、壁柱穴は方形に巡っています。おおよそ半分は調査区外にあるため判然とはしませんが、該期の住居跡は、鈴川右岸の子易地区では初の事例となります。

調査区東側の配石群（上部配石）下部から確認された配石墓は4基ありますが、配石墓群のうちJ1号配石墓からは、副葬土器（注口土器）が1点出土しています。



写真5 4-1 ③工区 J1 号住居 (南から)



写真8 4-1 ③工区 J16 配石異形台付土器出土状況(西から)



写真6 4-1 ③工区 J 配石墓群 (南から)



写真7 4-1 ③工区 J1 号配石墓副葬土器出土状況 (南から)

この配石墓周囲の土層中からは、ほぼ完形の異形台付土器が1点出土しています。4-1 ③工区では、配石墓群の上部にある配石群とそれを包含する土層中から縄文時代後期後葉の異形台

付土器が出土しており、配石墓の副葬土器も後期後葉の注口土器と考えられます。対して、配石墓群下位の土層中から検出された完形の異形台付土器は、明らかに後期中葉の土器です。

**【4-1 ④工区 +5a 工区の調査】** 平成31年度は、近世面、中世面、縄文時代面の調査を実施しています。5a 工区の近世面では、地形の傾斜に沿って段切が確認されており、段切によって区画された範囲に宝永火山灰廃棄土坑が検出されました。4-1 ④工区の近世面は、近現代道路によってかなりの部分が削平されていますが、古い道路に関わると推定される石垣と溝状遺構が検出されています。

5a 工区の中世面は、2面確認されていますが、中世1面には遺構が少なく、近世面とも共通する段切は、耕作地を区画する役割があったものと推定されます。中世2面は、西側に隣接する3d 工区から延伸する石敷溝状遺構（溝状遺構）が確認されており、道路として使用された可能性があります。石敷溝状遺構の周辺には、併行するように溝状遺構が検出されており、道路に伴う側溝の役割があったのかもしれませんが、調



写真9 5a工区中世石敷溝状遺構（東から）

査区北側では隣接する4-2工区西から延伸する断面V字状の深い溝状遺構が検出されています。

5a工区の北側および4-1④工区には、弥生時代および縄文時代の遺構面があります。5a工区の弥生時代面は、陥し穴が少し分布するのみですが、4-1④工区には僅かに谷地形の最下層である河道が確認されています。弥生時代の河道は、3d工区の前年度調査においても発見されており、同じ河道である可能性が高いと考えられます。河道覆土からは、トチの実と思しき種子が多量に出土しました。

4-1④工区の縄文時代面では、2軒の住居跡

を確認しています。遺存状態はよくありませんが、炉跡（土器埋甕炉）と壁柱穴の配置が明瞭に検出されました。5a工区の縄文時代面は、少なくとも2軒の住居跡を確認しており、ともに縄文時代後期前葉～中葉の敷石住居跡です。今後、住居跡はさらに発見されるものと思われます。

#### 【4-1④工区+5b工区東+5d工区の調査】

平成31年度は、前年度に引き続き、古墳（2号墳）石室を調査しています。遺骸を安置した玄室の長さは約5m、幅約1mを測り、床面には3～5cm大の礫が敷かれていました。玄室床面からは須恵器、鉄鏃が出土しています。

【6-3工区の調査】 平成31年度は、前年度から引き続き、古墳時代面、縄文時代面の調査を実施しています。古墳（1号墳）の墳丘調査では、地山である疑似ローム相当層を水平に整地し、その上に盛土して墳丘構築を行っていることが明らかとなりました。石室堀方は長方形に掘り込まれており、堀方床面をさらに掘りくぼめて石室基底石を設置しています。石室床面は礫床となっていますが、床面直上から鉄製品・銅製



写真10 4-1④+5b東+5d工区古墳石室基底石（南東から）



写真11 6-3工区古墳石室鉄鏃出土状況（南西から）



写真 12 6-3 工区 J11 号住居検出状況（南東から）



写真 13 8 工区残地 J1 号集石検出状況（北から）

品・人骨が出土しています。さらに、礫床を取り外した床面下位からも遺物の出土があり、礫床の作り替えの可能性があります。

なお、古墳調査終了後、墳丘下位から縄文時代後期前葉の敷石住居跡が1軒検出されました。炉跡（土器埋甕炉）とそれを取り囲む部分敷石、周堤礫の一部が検出されています。

### 子易・大坪遺跡

伊勢原市子易地内に所在する遺跡で、標高104～106m程を測る鈴川右岸の段丘面に立地しています。過年度の調査では、縄文時代中期末葉～後期初頭および後期後葉の集落が発見されています。平成31年度は、8工区残地の調査を実施しました。

**【8工区残地の調査】** 平成31年度は、前年度に引き続き、縄文時代面の調査を実施していますが、調査区全体から土石流の痕跡を検出しましたが、土石流の中からは、縄文時代中期～後期の土器片が多量に出土しています。また、調査区南東隅で集石が1基発見されています。

### まとめ

子易・中川原遺跡では、過年度調査区の隣接

地を調査することが多くなり、一つの調査区だけでは遺跡全体や遺構の解釈が困難になっています。5a工区では、中世2面で西側に隣接する3d工区で見つかった石敷溝状遺構の延伸部分が発見されており、1-1工区・1-2工区・1-4a工区で見つかった中世寺院跡へと至る参道の可能性が考えられます。

縄文時代面では、特に過年度調査成果との関連が重要であり、4-1②工区、4-1④工区、5a工区で調査された縄文時代後期の住居跡は、4-2工区西で見つかった縄文集落（居住域）と一体のものです。同様に、4-1③工区で調査された配石群・配石墓群は、4-2工区東で見つかった配石群・配石墓群と一体のものと推定されます。周辺を含めた広い範囲を調査することによって、集落構造（居住域・墓域・祭祀域）が明らかになったことは大きな調査成果です。居住域は等高線に沿って分布しており、斜面地に形成された山麓の集落として、今後とも注目されていくものと思われます。（野坂知広）